

運難
千早

電

大正二年八月十日

日午五時十分 日午五時十分 日午五時十分 日午五時十分

電信者 海軍省

受信者 海軍省

電報譯

九日午六時 海軍省 西航船 切野
日海軍船 損着 十の 船一個 採收地
一箇の 船 採收地 十の 船 採收地
中ニテ

第三部

會計課

海軍

R-14

1297

1297

宮下

電 報 着 信 紙

局 着		局			發		名氏所居人信受	
取 扱 者	受 信	付 受 午 後	付 受 午 後	八 月 一 日	第 五 二 號	山 口 電 報 局	カ イ ノ コ ノ コ ノ コ ノ コ	
分	分	分	分	日	號	局	報	
定 指							+	
事 記								
番 着 號		數 紙		名氏所居人信發				
二 の		第 五 號						
印附日信着								

1298

電 報 着 信 紙

局 着		局 發					名 氏 所 居 人 信 受	
取 扱 者	受 信	付 受 午 後 後 前	付 受 午 後 後 前	月	第	局	報	(三)
		時 分	時 分	日	號			
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;"> 以 以 ア リ 、 タ カ </div> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;"> 廿 三 日 、 エ ウ シ ヨ ウ </div> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;"> ト モ キ ヨ ウ リ ヨ ウ シ ヨ </div> </div>						定 指		
						事 記		
						番 着 號 信	數 紙	名 氏 所 居 人 信 發
						第	六	號
						印 附 日 信 着		

1299

曹長 平野 千四

第三艦隊第一四八號二

大正二年八月二十二日於上海旗艦對馬

第三艦隊司令官名和又八郎

海軍大臣男爵齋藤 實 殿

千早兩艦錨鎖切斷ノ件

別紙寫入通ノ千早艦長ヨリ同艦兩艦錨鎖切斷ノ件

會報 報告別有之候

右 報告ス

第一班 (別紙寫入或葉添)

第三班

終

海軍本部

軍令部



1300

宮下

寫

千早第八九號

大正二年八月十二日於漢口

千早艦長白石直介

第三艦隊司令官名和又八郎殿

西船錨鎖切斷ノ件

漢口碇泊中本月九日午後軍事急檢ノ際前方ヲ長大丸
 矢ノ末ルヲ見直ケニ揚錨機械ヲ準備シ「ユラッ」及飛輪ニ
 配員シ危險ノ際ハ轉舵シテ之ヲ避ケントスル決心ヲ執リ時ニ矢ハ
 本艦ノ右舷ニ換リ居ルヲ以テ其ノ後流ニ來ラハ本艦ノ右側ヲ通
 過スルモト思ヒ右舷錨鎖ヲ延セリ然レニ矢ハ中途ヲ意志
 ヲ変シ本艦ノ左舷ヲ通過セント試ミタル為メ次第ニ觸撃ノ危
 險ニ迫リタルヲ以テ輝轉ノ準備ヲ命ズルト同時ニ面舵一杯ニ

予之ヲ避ケントシタルモ矢ハ約百米ノ長サナリシ為ノ遂ニ之ヲ
 避ケルヲ得ズ本艦艦首ニ觸撃シ錨鎖切斷ノ虞アルヲ以
 テ次第ニ之ヲ延ハシ其ノ間後ニ於テハ斧ヲ斧ノ連結索ヲ
 切斷セントシタルモ多数ノ索アル為メ全部ノ切斷容易ナラ
 ズ遂ニ左舷錨鎖ハ約五節ノ処ニテ切斷シ續テ右舷錨鎖
 ハ五尋位ノ処ニテ切斷セリ依テ直ニ「ケッヂアンカー」ニテ探錨
 ヲ試ミタルモ日没迄成效セズ止ムヲ得ズ午後八時日清汽船ノ準
 頭ニ繫留セリ翌十日午前七時七港前日ノ通り探錨ヲ試ミタルニ
 幸ヒ午後五時頃左舷錨ヲ拘投スルヲ得此ノ錨ニテ舊位置
 ニ碇泊セリ十一日早朝ヨリ三ツ目錨ニテ探錨スルモ未ダ成效セ
 ス右舷錨ニハ僅カ五尋ノ錨鎖附着シ居ルノミナルヲ以テ拘投容
 易ナラス高キ極カ探錨ニ努ムヘキモ成效ノ見込確實ナラス本
 艦ハ上海ヲ除ク外錨地ヲ選定セハ單錨泊ニテ居支ナキモ念ノ

(正統後 船政會社)

海軍

為メ約一吹許ノ錨送付方ヲ舞鶴工廠ニ請求セリ

右報告ス

追テ我觸撃ノ際ハ本艦ノ操縦並準備等本職自ヲ辨

令セリ

(海)

供覽

皇

軍務局

司法局

第三艦隊機密第八號

大正二年八月二十四日於上海

第三艦隊司令官齋藤實殿

海軍大臣男爵齋藤實殿

局員

查定書進達ノ件

軍艦淀坐洲事件ニ関シ別紙ノ查定至

當ト認メ

右進達ス

追テ誠告方吳鎮守府司令長官ノ照會致シ

置候

別紙五葉添

認

海

09.8

軍務局接受

2月1日

1304

軍艦淀坐洲事件査定書

事實

一 大正二年四月廿一日午前十一時五十八分坐洲同日午後零時二十分

離洲

二 蘭領ホルネアバックス港トリス島ノ南三六度東一哩在

水深一尋三底質細砂ヲ混ヒ軟泥

三 艦首方向東北東

四 坐洲セシ狀況及坐洲後處置(附圖參照)

當日午前六時三十分堂油搭載、目的ヲ以テ製衣油會社前面

錨地ヲ離レ午前七時製油會社第二棧橋ニ横附シ午前十時

堂油搭載ニ終リ午前十一時錨地ヲコケランダカン市街南方ニ

移サントシ前記位置ニ坐洲セシモナリ

海

軍

此日蘭國地方官憲ハ特ニ好意ヲ以テ官傭水先人ヲ乗艦セシ
 メ水路嚮道ヲ任ニ當ラシメタルヲ以テ該水先人ヲ以テ艦操縦
 ヲ當テラシメ艦長自ラ之レガ監督ヲナレワ、アリテ午前十一時較
 細シ解キ兩舷機後進ニテ棧橋ヲ離レ右舷ニ回頭スル如ク操
 船シ十一時四十分兩舷機前進原速(八浬)ヲケランガ市街南方
 錨地ニ向ヒテリ 錨地ニ就テ水先人ハ本艦喫水ハ少ク浅堆ノ
 上ニテ水深充分ナリト云ヒタド艦長ハ此浅堆ヲ避ケ成ルベク市街
 ニ近ク投錨センコトヲ通告セリ 時恰ニ降雨ノ後ニ際シ海水濁濁シ
 揚子江ニ於ケルガ如ク甚メシカラスト 雖水面ノ狀況ヲ以テ水深淺
 ヲ知ルニ由ナレ而シ此官傭水先人ハ二十年間此地水先ニ従事
 シツ、アリト、事ナレバ艦長ハ此附近ノ水路ニ就テハ先ツ此ノ水先人
 ヲ以テ海圖以外ノ智識ヲモ有シ信用シ得ベキモノト思惟シテ又
 航海長ハ市街南方ノ浅堆ヲ避ケン手段トシテ海圖上挂燈



浮標ヲ北七十八度西ニ見ル一線ヲ引キ安全境界線ト定メ置キタリ已
 ニレテ挂燈浮標ニ近ツキ十一時五十四分半速トナレ次テ十一時五十九分
 兩舷機前進微速トシ挂燈浮標ノ南ヲ廻リ急ニ取舵トナシ
 安全限界ヲ逸セントシタルニヨリ航海長ハ淺クハナキカト警告告セシニ
 水先人ハ充分水深アリトノ答ヲナシ 剋ヘ手ヲ振リテ安全ナル旨ヲ
 示セリ此時艦長ハ直ニ物標ノ方位ヲ測リ未ダ何等ノ手段ヲ
 令可敷セザルニ先テ坐洲スニ至リタルニ直ニ停止後退原速ヲ
 命ニ離洲ヲ試ミルト共ニ防水扉蓋及舷窓ノ閉鎖ヲ命シ
 一方掛員ヲシテ艦周圍ノ鐘測ヲナシメ艦首及前艦橋下
 一尋^三中部右舷々門下二尋半左舷々門下二尋^三等ヲ得
 前艦橋ヨリ前方ニ於テ輕ク泥沙ノ上ニ坐洲シタルヲ知リ尚當時
 風向南東カ一張潮流始マラントスル最低潮時ナリカバ此儘ニテモ
 漲潮ト共ニ離洲ス可キヲ信シタレド風潮ノ關係ヨリ萬一ニモ

毎 頁

船體ノ後半ヲ坐洲セシムルニ至ランヲ慮リ即時、ストリーム
 カン搬出ヲ令シ一先ツ汽機ノ運轉ヲ停止シタリ然ルニ搬出
 用意未ダ成ラサルニ艦尾右轉漸次離洲スルノ模様見エ
 タレハ「ストリームカン」搬出ヲ止メ錨搬出、為ソ下口ニカッ
 及ビ汽機ヲ以テ後部右舷側五六十米突、間ヲ鏗測セシメ
 三尋乃至四尋タルヲ知レリ依テ直ニ總員ヲ後部ニ移シ再ヒ西
 船機ヲ後進原速トシ間モ少ク午後零時ニ十分離洲スルヲ得
 タリ

五 船體ノ検査

離洲後艦底各部ヲ検査シ又四月廿四日「マカッサ」港ニ於テ
 潜水器ヲ使用シ艦外底ヲ検査シ結果尚又吳歸著
 後査問會が吳海軍工廠ニ委託シ検査シ先結果ニ
 ハ何等異状ノ箇所見ラズ依テ同艦ハ坐洲、為ノ何等ノ

損害ヲモ受ケザリシモト認定ス

原因及責任

當時状況ヨリ察スルニ海圖ハ尺度充分大ナラス海水濁濁ノ為ニ水面ノ状況ヲ以テ水深淺ヲトスル能ハサル等ノ事情アリ艦操縦ハ水先人ニ任スルコト固ヨリ不可ナレト雖モ其ル場合尚ホ艦長ハ艙密ニ注意ト周到ナル用意ヲ以テ之レニ臨ミ水先人ノ操縦危険ナルヲ自覺見セ直ニ自ラ之ヲ避クベキ手段ヲ採ラザル可カラズ事茲ニ出デザリハ坐洲スルニ至リテ原因ニシテ畢竟水先人ヲ過信シ之ヲ監視スルノ途ニ於テ盡サバリシ處アリシモノニシテ此点ニ對シ艦長ハ責任ヲ負ハサル可カラサルモノト認め坐洲後ノ處置ニ就テハ寸毫ノ遺憾ナシ

責任ノ程度

事誤ハ水先人監視ノ途ニ於テ盡サバリシト云フニテ此水先人々

毎

頁

ルヤハ蘭國官憲ノ好意ニヨリ特ニ乗艦セシメラル官備水先人
 ナリ同艦ハバリクパンシ港ニ入港スル以前ニ於テ港目テ艦長ハ二面
 高船ニ便乗出入セシニ経験アリ又水路標識等ニ就テモ今回豫メ
 充分研究シ水先人ヲ備入トスレテ入港ニ事件發生當日モ若シ
 蘭國官憲ノ好意ナカリセハ水先人ヲ備入トスレテ濟付マス心算
 ナリレト云フサレハ一面ヨリ觀察スルハ官憲ノ好意ニ見水先人ヲ
 乗艦セシメタルが為ノ却テ禍ニ遭ヒタル觀アル水先人ヲ乗艦
 セシメタル以上六充分ニ監督ヲナシテ過失ナカラシムラト期スベキハ
 艦長ノ責任ナリ然レモ坐洲ノ為ノ公典ニ何等微少ノ損害ヲモ
 受ケス坐洲時間モ僅ニ二十二分ニシテ其後ノ行動等ニ何等支
 障ヲ與ヘタルモノニ非ス又坐洲後艦長ノ執レル處置ニ就テモ
 寸高毛ノ貴感ナク要スルニ本件ハ事態甚々輕微ニシテ責
 任者ニ對シ徵心四討令明文ヲ以テ論シ得ガキ非ルモ事ノ甚カ

輕微ナル場合ニ於テハ須以常識ヲ以テ判断シ軍ニ法理一轍ヲ以テ擬スベキモノニ非ス依テ責任者先艦長ニ對シ慎重ナル注意ヲ促シ將來ニ對シ誠告ヲ加ヘ置クヲ以テ適當ト査定ス

大正二年七月十九日

軍艦淀生洲事件査問委員會

委員長 海軍大佐 岡野富士松

委員 海軍少佐 神代護次

委員 海軍大尉 加藤長太郎

委員 海軍大尉 室松良一

委員 主理 潮見茂樹

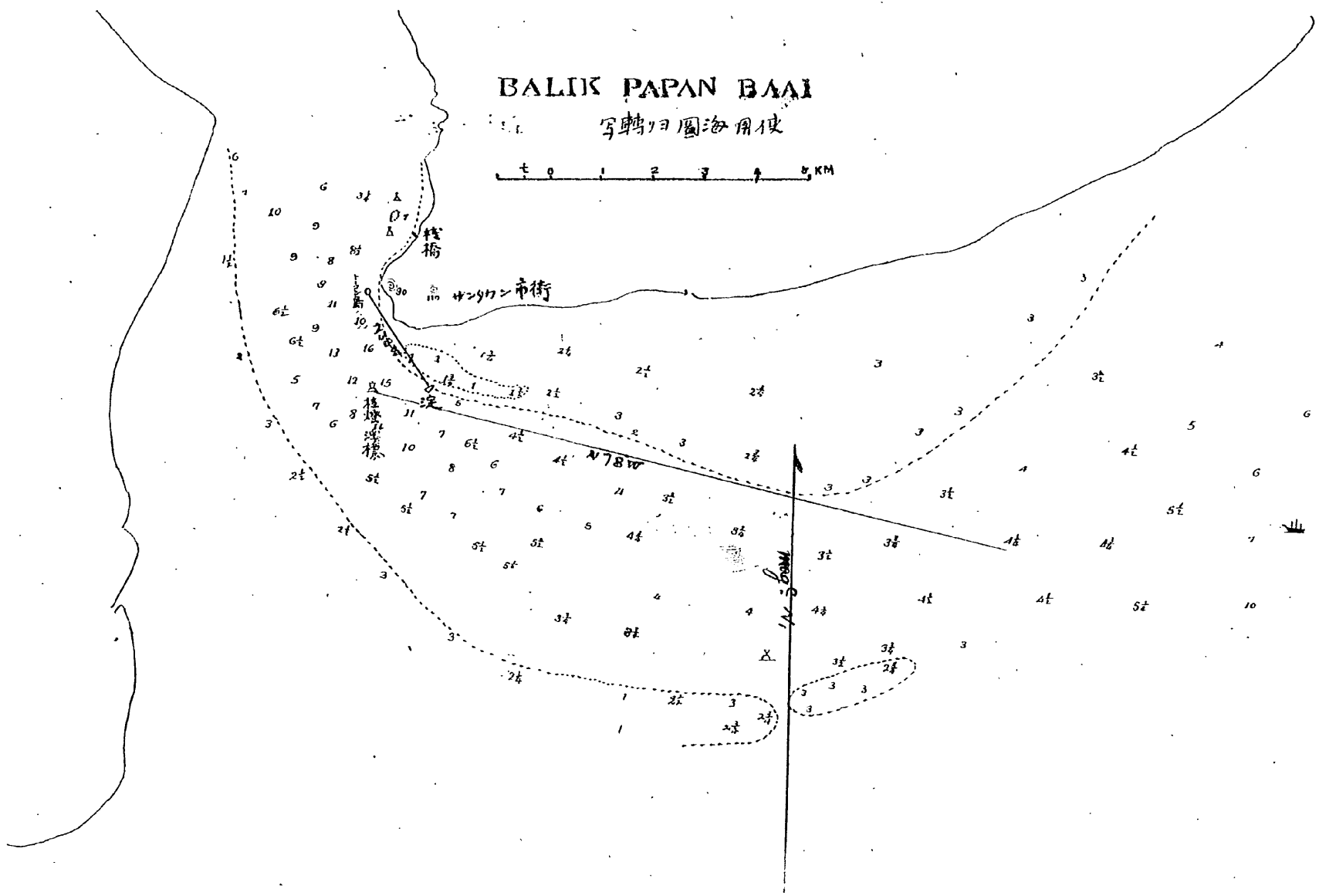
委員 會書記録事 森井光雄

海軍

BALIK PAPAN BAAI

写轉日圖海用使

0 1 2 3 4 5 KM



1312

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>

可
注

電

軍務局

司法局

第九師三

大正二年六月廿日於漢口

第三艦隊司令官名和又八郎

海軍大臣岡田齋藤實殿

軍艦淀坐洲ニ関シ查問委託ノ件

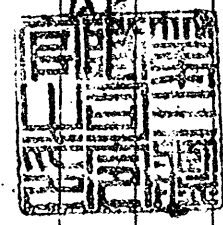
軍艦淀
坐洲ニ関シ別紙写一通
吳鎮守府司令長官
請查方委託致候

右報告ス
(別紙写五葉添)

海軍

96.26

海軍省
庶務課



2. 0. 25

1313

寫

第三艦隊機密第九八號ノ二

大正三年六月十六日 漢口ニ於テ

第三艦隊司令官名和又八郎

吳鎮守府夏長官加藤友三郎殿

軍艦定坐洲ニ關シ査問委託ノ件

軍艦定坐洲四月十一日ヨリテ錯地更換ノ際トヨリ

嶋南手ノ度東一連ニ鏈ノ地点ニ在ル砂堆ニ坐洲セリ右ニ對

査問ニ付スル等調査ノ必要アルモ當方ニテハ調査ノ便無シ

候條同艦貴軍港到着ノ上右調査方御委託致度候

條可然御取計相成度

右照會ス

追テ本件ニ關シテハ其旨海軍大臣ニ報告致置候

(別紙定艦長坐洲顛末報告書添)

終

海軍

遊機密第五五號

大正三年四月廿四日 於マカッサル港

第三艦隊司令官名和又八郎殿
遊艦長保坂考太郎

書類進達ノ件

一、四月廿一日 坐洲顛未報告

右進達ス

迄通

終

大正三年四月廿一日 坐洲顛末報告

此日重油搭載ノ為メ午前六時半出港用意、七時製油
會社第三號校橋ニ横著ス

右出港前サ蘭國地方官憲ハ好意ヲ以テ特ニ官備先
人ヲ本艦ニ乘艦セシメ水路嚮導ノ任ニ當ラシメタリ

午前十時重油搭載ヲ終リ十一時再ヒ前記水先人ノ案内

ニリ錨場ヲシテカニ市街ノ前方海面ニ移セントシト

一公里岬ノ南方ニ桂燈浮標ノ南ヲ廻リ入港用意ノ

既置ヲ以テ錨場ニ向ヒ微速力四節ヲ以テ航進中

午前十時五十八分左記ノ砂堆ニ坐洲セリ

坐洲位置 トコ山島南サ度東一哩ニ鐘 水深一尋四尺三
底質泥砂

坐洲當時ノ艦首方向 東北東

坐洲後ノ處置

原 臣

附近一帯ハ底質泥砂ナルヲ知レルカ故ニ直ニ兩舷機ヲ
 後進原速トナシ離洲ヲ試ムルト共ニ防水扉蓋及舷
 窓ノ閉鎖ヲ命ジ別ニ櫓負ヲシテ艦ノ前後兩舷ノ
 測錫ヲナシメテ水深ヲ得リ
 艦首及前艦橋下 一尋四分三
 中部右舷ノ門下 二尋二分一
左舷ノ門下 二尋四分五
 三尋
 底質泥砂
 艦尾 三尋
 本艦ノ吃水 後部 十一呎
前部 十五呎六寸
 乃々前艦橋ヨリ前方ニ於テ輕ク浪沙上ニ坐洲セルヲ知レリ
 當時 風向南東カ一潮流ハ漲潮流ノ始ムトスル時期
 (高潮 午前六時、低潮時 正午、日齡 十五日) ニシテ最
 低潮ノ時 十二(大潮昇八呎、小潮昇六呎) 此儘艦
 位ヲ保持セハ漲潮ト共ニ自ラ浮上ルハキヲ信シタレ

船体ノ検査

氏風潮ノ關係ヨリ萬一ニ船体ノ後半ヲモ啖洲
 セレムルニ至ラレトアルヲ慮リ即時ストリームアレカ
 運搬ヲ令シ一先ツ汽機ノ反轉ヲ停止セリ然ルニ運
 搬ノ用意未タナサルニ艦尾右舷ニ轉シ漸次離
 洲スルノ模様見エタレハ錨ノ準備ハ之ヲ中止シ錨
 運搬ノ目的ヲ以テ却シタルガツタート汽機汽機ハ錨地敷
錨ノ為メ逆ニ岸トニ命シ本艦ノ後部右舷外側
 約五六十米間ノ側錨ヲ行ハシメ右所共三四
 尋ノ間ニアルヲ知レリ 依テ直生ニ総員ヲ後部
 甲板ニ移シ再ヒ兩舷機ヲ後進原速トシタル
 ニ間テナク午後〇時廿分ニ至リ離洲後退ス
 ルヲ得タリ

毎

頁

午後。時三十分。錨場ニ就クヤ直サニ掛員ヨミテ
 仔細ニ艦ノ内底右部ヲ点檢セシメタルニ異狀ナ
 シ
 當日ハ午後驟雨アリ艦ノ外底檢査ニ便ナサレハ
 翌日出港前 艦ノ内外ヨリ再應(此外底檢査ニハ
 潜水器ヲ使用セ
 キリ) 檢査 ヲシタルモ 何等ノ異狀ナシ
 右ノ如クシテ 船舫各部ニ毫モ損傷ナキヲ知リタ
 レ氏尚念ノ為メ マカッサル入港ノ翌日 潜水器ヲ使
 用シテ前部艦底ヲ調査シタルニ更ニ異狀ヲ認メス
 艦ノ操縦及水先人
 當時恰モ 錨地ニ就ク直前ニシテ 總員入港用意ノ
 既置ニテリ 艦ノ操縦ハ本職監督ノ下ニシテ 水先人
 ニ委シタルガ後 左人ノ云フ処ニヨレハ 此附近ハ頗

覽

海軍

軍務局

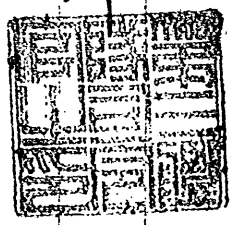
司法局

第三艦隊機密第六六號

大正三年四月八日 於上海旗艦對馬

第三艦隊司令官名和又八郎

海軍大臣男爵齋藤 實殿



宇治崇明島北側水道測量中一時坐洲ノ件

先般宇治ノ崇明島北側水道ノ測量ニ從事セシメタル際ニ同艦ハ三月二十七日正午同水道西口ヲ東ニ入りシモ陸上著明ノ好物標無キヲ以テ先ツ汽艇ヲシテ南北ニ「ゲクザク」航行錘測ヲ行ハシメ本艦ヨリ其ノ位置ヲ測カリ次テ汽艇^{カッター}ヲ碇置レ兩艇ヲ目標トナレツ本艦微速航走測量セリ然ルニ午後四時五分針^南方ニ反轉セント欲シ右舷ニ回頭中崇明島北端ヲ南六十三度

東ノマイソシノ角立標ヲ南ニ千四度西四哩強ニ見ル地点ニ
於テ艦首微カニ淺洲ニ接觸シタルヲ以テ直ニ後進全
速ヲ試ムルモ離洲セズ時恰モ満潮時ニシテ其後漸
々水深減小シタルカ故ニ最低潮時ニ於テハ艦首附
近ノ河底僅カニ水面上ニ露出スルノ程度ニ至レリ但シ
艦尾ニ於テハ尚ホ四尋余ノ深水ヲ示シ艦体傾斜
僅カニ一度半ニ及ヒシ外異常ナク其後ノ處置宜シ
キヲ得テ廿八日午前四時三十分ノ漲潮時ニ及テ無事
浮出離洲スルヲ得タルヲ以テ其儘作業ヲ繼續遂
行シ三月三十日上海ニ歸着セリ就テ之レヲ審査スル
ニ長江末測地測量者ノ執ルハキ注意ハ充分ニ周到
ナリシト不幸ニシテ坐洲シタルモ其後ノ處置ハ能ク機
宜ニ適シ且ツ艦体ニ何等ノ障害ヲ與ヘサルヲ確認

馬

海軍大臣

電

官局上院
台中海軍

軍務局

大正二年九月廿一日午後十時十分
正二年九月廿一日午一時十分
局發 局着

受信者 軍令部長

發信者 馬場

馬場的艦長

電報譯

十五日空船離下流之於肥城之故障生じ
復旧作業多し陸岸横作ノ際船底之尖岩
アリ横付一時半ノ間ニ五吋隙水為望岩ニ離
若ノ際右舷石炭庫ニ長ク二ノ吋幅一ニリ
ノ裂穴生じ生七リ詳補書面報告之損所ハ防
水完全高貴急務ニ航及修理ノ時機中
得ニ長期間ノ行動任務ニ差支ナシ

(3)

海軍

1324

洋務局

大正二年九月十七日午前十時一分
大正二年九月十八日午後一時五分

海軍局發
海軍局着

No. 119/9

受信者 海軍大臣

發信者

鳥羽艦長

電報譯

十五日控嶺灘(宜昌至毛潭地)ニ於テ舵機ニ故障生
 復旧作業ノ爲陸岸横付ノ際艦底ニ尖岩アリ
 横付一時半ノ間ニ五吋減水ノ爲メ坐岩ニ離岩際
 右舷石炭庫ニ長ク2吋對ニ吋半幅一ミリノ
 裂罅生セリ 詳細書面報告ス損
 所ノ現狀完全ニシテ急務ニ及修理時期
 ヲ得ル迄長期間ノ以テ動任務ニ差支ナシ

海軍

1325

抄

軍務

電



大正二年 十月 十九 日 午後 三時 十三分 下関 局 發
大正二年 十月 十九 日 午後 五時 二十分 海軍 局 着

No 119 / 9

受信者 海軍大臣

發信者 第三艦隊司令官

電報譯

鳥羽十五日 崆嶺下流に於て 砲機之故障ヲ
生じ 復旧作業ノ為メ 陸岸横付ノ際 艦底之尖
岩アリテ 僅横付一時 卅半ノ後 五時 減水ノ為メ
觸岩シ 當岩ノ際 右舷石炭庫ニ長ク 一時半幅
リメートルノ裂損ヲ 生セリ 此レ既 換所ノ完全ナ
ル 防水ヲ 施シ 長期ノ 航行 妨礙 遂行ニ 差支ナシトシ
報告ニ 接シ 其後 復 航行セシム 當國 艦長 報
告 接年ノ 上 洋 綫 書 面 報告ス

海軍

西
平
丸

皇

覽

司法局

人事局

軍務局

第三艦隊機務部第一〇七號

大正二年十二月十四日於南京

第三艦隊司令官名和又八郎

海軍大臣男爵齋藤實殿

鳥羽坐礁ニ関スル件

鳥羽ハ本年九月十五日午前六時宜昌ヲ發シ重慶ニ向
ヒ湘江ノ途ニ就キレカ今日午前十時半頃航機ニ故障ヲ
生シ到底空船灘ノ急灘ヲ航過スル能ハサルニ至リシヲ
以テ其ノ下流一哩ニ於テ左岸ニ横附ヲナシ航機故障復
旧作業ヲ急行シ約一時間半ニシテ之ヲ終リ横附ヲ離
サントセル際六吋餘ノ急激ナル減水ノ為メ右舷石炭庫

青
言

宮下

2. 12. 28

1327

下ニ於テ尖岩ニ墜セルヲ察見シ機宜ノ處置ヲナシテ離礁
スルヲ得艦底ニ少シク損傷ヲ受ケタルモ直チニ應急處
置ヲ施シテ航行ヲ繼續シ重慶ニ達シテ警備任務ヲ全
フセリ當時ノ状況ハ九月二十八日附令艦臨時現狀報告
ニ詳記セルカ如ク舵機故障ノ為メ甚ク困難ナル位置ニ陥
リ而モ異常ノ減水ニ遭遇シ遂ニ尖岩ニ墜スルニ至レル
モノニシテ殆ント天災トモ謂フヘク倖ニシテ損傷極メテ輕
微ニモアリ事實モ亦査問ヲ俟タスレテ明白ナル如ク
艦長ノ處置ニ就テハ別ニ懲罰ニ處スルノ必要ナキモノ
ト認メ將來ノ注意ヲ與ヘ置候

右報告ス

終

電報

No. 77/10

大正二年十月十三日午後八時五十分 佐世保 局發
大正二年十月十三日午後十時一分 海軍 局着

受信者 海軍省副官 韓崎艦長

電報譯

本日午前十時本艦々側ニ撃キアリタルコトが
ソリシ積ミタルコトライタル内ニテ爆裂シ
起シコトガソリシ約百七十箱ヲ燒失セリ本
艦及潜水艇ニハ何等ノ損害ナシ原因ハ人
夫由嚴禁シ犯シ船内下部ニ隠シ密切カニ喫
煙セントレコマツチニシ摺リタルニ因ル委細ハ吳
鎮長官ニ報告シタルモ新聞等ニテ誤報
ヲ傳ヘンモ計リ難ク事實ノ真相ハ秘之置
シ必用ナレト思フ右了知アリ海軍

(花崎納)

宮下

1329

軍務

10.76/10

大正二年十月十三日 午後七時三十分 海軍局發
大正二年十月十三日 午後九時五十分 海軍局着

發信者

島鎮守府副官

受信者 海軍省副官

電報譯

韓崎艦長ヨリ左ノ電カキ

本日午前本艦左舷前部外側ニテ第十二

潜水艇ハ三隻ノライタルヨリカソリニ搭

載申午前土時既ニ搭載シ終リタルトキ

ライタルニ於テ突然小爆発ヲ起シ其ノ

ライタルニ搭載セル約六千律ノカソリニ

焼失セリ該ライタルハ直ニ艦側ヨリ沖

迄ニ放シタルヨリ本艦潜水艇等ニ何等

海軍

密

1330

海軍

中
左報生ル
損唐ロナレ原因ハ形頭禁シ把ニ喫烟ノ
為ノ燐寸シ摺リタルニ依ル如キ毛糞調査

(花崎納)

川
51
7/10

供覽

電

軍務局

政本部

司法局

大正二年十月十四日

名寄島鎮守府 副官

第三部
第十四部
警務課

一、韓山船長了りがソリン爆薬を二袋を電報写 音通
加送附ス

(分件ニ系添)

(陸)

2.10.20

1024

1332

船政 10.21

2.10.18

船政小接室

20
10.20



海軍

發信地	佐世保	十月十三日
發信者	榊崎 艦長	發信時刻 午後八時四二分
受信者	司令長官	着信時刻 午後九時十七分

電文譯

ガソリンライター内ニテ爆發發セル原因ハ船内ニアリシ
 一人夫散禁ヲ犯シ六糶ニ該船内ノ後部出入口ノ木
 部ニ在リテ喫烟ノ為憐寸ヲ摺リタルニ依此事實
 ハ本人ヨリ申出テタリ本人ハ兩足左手等ニ火傷ヲ
 受ケ病院ニテ療急手當ヲ受ケ直ニ高田高會
 ニ引渡セリ此人夫ハ陸岸ヨリ本船ニ来リ途中船
 内ニテ喫烟セルトシテモ高田高會ヨリ乗込メ
 派遣セ

電文
ニキメ

1333

監督ノ爲メ叱ラレテ止メ又本船側ニ待合セ申セ
喫烟セトシテ本船ノ兵員ヨリ叱ラレテ止メタルモ遂ニ船
内ノ後方下部ニ隠レテ穴糲カニ喫烟セトシタルヲ
趣
右
報告ス

(六)

1334

唐船

唐

軍務局

濠政本部

司法局

第五七

大正三年十月廿四日

吳鎮守府司令官代理

海軍中將 村上格

局長

海軍本部 陸軍省 齋藤 啓

第三部

第四部

會計課

本件 燒失之蘭スル件 岡野 韓崎 艦長

右報告有之候

右報告出ス

海軍

2.10.29

1335

韓崎機室第百三十三号

大正二年十月十一日 中音 佐世保

韓崎社長 岡田高介 様

長崎方面の海難の被害に三島

カッリと焼失の事 詳細

大正二年十月十三日 本航の佐世保港内三番線
標ニ繋糸泊中ニシテ右舷前部ニハ船中
ハ潜水艇左舷前部ニハ船中十二潜水艇
横切ケシアリテ出帆の旨田高介出張
ヨリカッリと油三石律ヲ五隻ノ国平船
平等ニ分載シテ持来リ各機ニ一隻宛直

掲名 清水船之積載ノ際定ナリシヲ以テ午
 前九時迄々本記ニ於テ例ニ依リ總テノ火
 氣ヲ消サレメ本記横所中ノ三隻、清水
 船ニ於テ積取リ、準備ヲ終リ午前九時
 四十分頃五隻ノ国平船本記、附近ニ来リ
 ヲルヲ以テ直ニ各船ニ一隻宛テ死シテ、
 撲殺ヲ致メタリ然レニ亦九、十、十一、清水船、
 二隻、五隻ヲ要ス 衝突頭部ヲ、奥雷
 為船一箇宛、試射、為港内庵崎、南
 東方ニ出動中ナリシヲ以テ残余二隻ノ国
 平船、本記ニ直ニ前部ニ、暫時即九、十
 一、清水船平洪埋立地西方、新江清水船繫
 為切、帰着ニ迄待合セ申ナリシ交午前十

一時五分節十二階水缸の積載を終りしとせ
 し瞬間に右待合中の一俵、圓平の穴に火が
 入り、瓦斯の突燃せしむる小爆発を起し、積載の一罐
 に引火して燃焼を始めたり。伝は先づ横街中、
 各階水缸より溢れ、他、圓平の穴も直に他方へ
 火を延焼せしむるに本所へ火が移り、時を移り、
 防火設備の所から左舷前部へ火が移り、
 夕に、用用之水をせしめ、當該處に平水
 艇を寄せ、切断し、汽船の沖合に曳き出さ
 せしむ。時、港務部大型曳舟を着せしむ
 べきに曳き出さるる伝は、丸瀬外に碇泊
 せしむ。消火を待たせしむるに、換気機が
 千律乃至當該圓平の半焼にせしむる外に、

因高命在傭人其一名兩足の片を火
 傷り見ると左程ノ重傷ニ至り本船の
 為清水船ト云官電之損害ヲ蒙ケス原因
 右ノ損傷シタ人其船内後部小ハツチ
 下ニ隠レテ密ニ招隊本ヲ招り見為飛艇中
 ノカソリシ瓦斯ヲ爆発セシメ其ノ火災ニ依
 テ船内中央部より一缶ニ引火シタニ依
 此ノ事より本人應急手当ヲ受ケシ為メ海
 軍病院ニ送リ見時ヲ留置ニ對シテ自白
 セシヨリ直ニ明瞭トナレリ本人ハ船ノ本船ニ
 乘ル途程中ニ於テ喫烟ノ為メ火ヲ點セシトシテ
 監督者ヨリ叱責セラレ止メ又本船ノ側ニア
 リシ時モ一回全様ノ行為ヲササレシテ清水船

下土、乃、制せし止、終、下、方、隠、し、
 招所本、招り、え、たり、而、高、田、高、分、の、旅
 子、火、氣、を、考、し、つ、相、当、の、況、を、し、し、
 一、同、の、對、し、つ、火、氣、の、山、殿、林、亦、た、
 々、五、十、五、の、志、を、し、
 右、報、告、す、

5

海軍

電報

電報局

大正二年 十一月 六日 午後 九時 十分
吳 漢 同 發

受信者 海軍 次官 吳 鎮 英 謀 長

電報譯

本日午後四時十分 鎗聲 散
中 職 下 斯 爆 發 為 救 師 名 外 救
手 職 下 傷 顏 面 熱 毒 多 生
何 七 輕 傷 建 物 等 損 害 無 二

海軍

1341

電

大正二年

六月六日

午後

九時十分

吳淞局發

(花時納)



受信者

海軍次官

發信者

吳鎮英謀長

丸内局着

電報譯

本日午後四時五十分
鋼環燒融工事
中瓦斯爆發
顏面為技術師
手職工名
顏面熱傷
何七輕傷
建物等
損害無し

艦政本部

司法部

人事

海軍

1342



電報送達紙

注意 受付月日の記入を省略したるものは受付の當日著局に於て受信したるものとす

注意 万 他人に宛てたる電報の配達を受けたるときは其由を付箋し直に之を配達したる電信局所に返戻せらるべく決して其受取本人へ直送し又は手渡しせらるること

著者局		發局		受信人居氏名	
受信者	著者	付受	第	<p>東京府 芝罘</p>	
時	時	月	報		
分	分	日	局		
指				發信人居氏名	
事記				<p>東京府 芝罘</p>	
著者局附印		著者局附印		著者局附印	

印刷局製造

1343

電 報 送 達 紙

注意 受付月日の記入を省略したるものは受付の當日著局に於て受信したるものとす

注意 他人に宛てたる電報の配達を受けたるときは其山を骨變し直に之を配達したる電報局所に返展せらるべく決して其受取本人へ直送し又は手渡しせざること

局著	局發	受信人住所氏名			
信受 午	付受 午	第	月	日	報局
時	時				
分	分	字	號	號	號
指 定					
記 事					
受信人住所氏名					
著局日附印			號	卷	箱

1

1909年11月24日
 午後5時
 東京
 電報局
 受信
 1909年11月24日
 午後5時
 東京
 電報局
 受信

印刷局製造

1344

海 兵
海 兵
箱



1345



曹潔

軍務局

艦政本部

司法局

六〇八

大正二年十一月十日

吳鎮守府參謀長大次喜七

海軍次官財部彪殿

局員

砲熳

藤田

砲身燒山敷事
中瓦斯爆發ノ件
本件ニ關シ去心
六月有取敢電報
報告致置矣處
別紙ニ通稱上工
敷長ヨリ通知有
之矣ニ付
右報告ス

別紙

海

艦 11-10

軍

2. 11. 10

軍務局接受

15/11

1346

711-21



号二第ノ三二八号

大正二年十一月七日

村上 景海 軍工廠長

大澤 吳鎮守府參謀長殿

瓦斯爆発ノ件

別紙字ノ通り制衣鋼部長 茲砲煩部長ヨリ
届出矣条為念

右通知ス

追テ建築物ニ何等ノ損害無之ニテ申渡シ也

別紙三葉添

終

海軍

1347

大正三年十一月七日

瀬戸製鋼部長

種子田砲煩部長

村上工廠長殿

砲身焼山嵌暖爐内瓦斯爆発ノ件

十一月六日午後四時四十分十吋砲2B鋼套焼山嵌工
事ヲ始メ暖爐内ニアル右鋼套ヲ吊上ル爲メ
起重機ノ釣ヲ掛ケトスルニ際シ爐内ニ残留由
セル瓦斯爆発シ爲メニ爐上ニアリテ作業シツク

了らる者ノ内左記九名ノ負傷者ヲ出セリ

右報告ノ
左記

傷	状	官職	氏名
顔面軽度ノ熱傷鼓膜ノ充血は瘡ニ要スル日數約三〇休業ヲ要セズ		海軍少佐	比企 彰
顔面軽度ノ熱傷兩角膜軽度ノ熱傷兩眼結膜充血約三〇休業ヲ要ス		海軍少佐	磯矢権十郎
顔面軽度ノ熱傷左在前膊中央部以下手背ニ見ル熱傷は瘡ヲ要スル日數約三〇休業ヲ要セズ		海軍少佐	村上惣次郎
右耳軽度ノ熱傷は瘡ニ要スル日數約三〇休業ヲ要セズ		海軍少佐	神戸吉元 環
兩眼結膜充血鼓膜充血顔面柱ノ軽度ノ熱傷約三〇休業ヲ要ス		海軍少佐	酒井康 仁
兩眼結膜充血兩眼角膜軽度ノ熱傷顔面柱ノ軽度ノ熱傷約三〇休業ヲ要ス		海軍少佐	胡 吾市
兩眼結膜充血兩眼角膜軽度ノ熱傷顔面柱ノ軽度ノ熱傷約三〇休業ヲ要ス		海軍少佐	空田徳次郎

